

---

# ブラコン！

奈津

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブラコン！

### 【Nコード】

N1730Y

### 【作者名】

奈津

### 【あらすじ】

親を小さい頃い頃に亡くした華は兄と幼馴染の家族に育てられた。そんな華も高校一年生になり、新たな第一歩を歩き出す。

シスコンな兄に不器用とドSな双子の幼馴染。

高校で出会う少し変わった友達に囲まれる華の毎日は、少し騒がしすぎるのかもしれない。

そんな感じのお話です。

## 1 はじまり（前書き）

初の小説で長編……、  
優しく見守ってください。

## 1 はじまり

親は小さい頃に事故で亡くした。同じ車に乗っていた私は、母親がかばってくれたお陰で右足に軽い障害を残しただけで命は取り留めた。

あれから十年経って私、春川華はるかわはなは高校一年生になりました。

「華、スカートの丈は膝より上に上げてはいけません」

「あなたは昔から華に対して心配しすぎだ」

「大丈夫でさ、華の下着なんか誰も気にならねえって」

入学式の朝、玄関の前で騒ぐのは順に兄の樹いしづ、双子の幼馴染の立花涼と俊りょうしゅんだ。お兄ちゃんは唯一の家族であり、高校を卒業してからは就職をして私を育ててくれた。もちろん当時、高校を卒業したばかりの男が一人で小学一年生の私を一人で育てるなど分らないことだらけな訳で…そんな時に助けてくれたのが、この幼馴染二人の両親だった。

家が隣だったから涼と俊とはその前からよく遊んで居たけどその事がきっかけでより近い存在になり、毎日のようにご飯と一緒に食べ、休日のお出かけも誘ってくれ、さらには旅行にも一緒に連れて行ってくれたり。私たち兄妹にとって立花家は、もう一つの家族同然の存在なのだ。

「もう、朝から人のスカートのことで心配なんかしないでよ。俊にいたってはそれどういう意味よ！」

「どついう意味も何もそのまんまの意味で」

「兄として聞き捨てならないなあ、その言葉。華みたいな可愛い娘この下着だったら僕は喜んで拝見さして…」

お兄ちゃんが言い終わる前に勢いよく振られた俊の鞆が顔に当てら

れ、その隙に俊は逃げるように高校への道を歩く。そんな俊を追い  
兄も歩き出したので、私と涼も二人を追うように歩き出した。

「俊も樹兄貴もなんであんなに朝から騒げるんだ？」

「仕方ないよ、昔からの習慣だから」

まだ眠たいのか頭を重そうにしている涼に、笑って私は答えると涼  
は私の髪に手を伸ばす。髪から手を離し握った手の中には桜の花び  
らが一枚入っていた。

「…ついてた」

優しく笑う涼。そんな涼の髪も春風に吹かれ、桜の花びらが一枚乗  
っかる。私も取ってあげよう、そう思っつて背伸びをすると身体のパ  
ランスを崩しこけそうになったが、涼に腕を掴まれなんとかこけず  
に済む。

「ありがとう、涼も取ってあげたかったんだけど」

「いや、いい。そのうち飛んでいくだろ」

そう言いながらも頭をクシャクシャとした時、今度は勢いよく大量  
の花びらが涼の顔に舞う。私がパッと横を見るといたずらが成功し  
て嬉しいのか、ニタッと笑う俊がいた。

「ちよつと俊、何してんの！」

「暇潰し。樹兄は飽きたから」

「通学中くらいは大人しく歩きやがれ！」

そうしてまた逃げる俊を今度は涼が追いかけた。ああ、なんだかん  
だ言っつて涼だつて昔からこうなんだから。二人して高校に向かつて  
逃げては追いかけるその風景を見ていた時、俊によって桜の花びら  
まみれになったお兄ちゃんが私の隣に立ち目が合う。私を見るその  
目は優しく、微笑まれると安心する。

「本当に大きくなったね、華。改めて、入学おめでとう」

「ありがとう、お兄ちゃん。…私ね、本当に感謝してる」

「どうしたの？いきなり」

そう言いながら私の頭を撫でる。

肩に少しかかりそうな綺麗な黒髪。前髪だつて目にかかりそうな長さ。だけど切れ長で綺麗な黒色の瞳をした目は優しく、存在感がある。肌だつて透けるように白く、高身長でスタイルだつていい。おまけに優しい。自分の兄ながら自慢したくなる程のものだ。こんな兄なのだからさぞかしモテるんだろうと思う所だけこの十年間、一度だつて彼女の存在を見せることはなかった。一度昔に聞いてみたことがあつたけど、「華が可愛すぎて他の女の人は可愛く見えななんだよ」って冗談でかわされてしまった。もしかすると本当は、私の面倒を見るのが大変で恋愛なんかには時間を使えなくなっていたなら。そんなことを妹ながら心配をしていた時期もあった。

「これからは、私も自分のことは自分でやっていけるように頑張るから。お兄ちゃんの時間、大事にしてね」

「何を言ってるのかよく分からないけど、高校生になったからって大人ぶるんじゃないよ？」

私も高校生だ。もうバイトだつて出来るんだから少しはお兄ちゃんの荷物にならないようにしていきたい、そんな気持ちを伝えたくもりだつたが残念ながら上手く伝わらなかつたようで。不思議がりながらも笑顔のお兄ちゃんは、最後に私の頭を強くグシャつとしてからいつてらっしゃいと、見送ってくれた。

私はこれから仕事で駅に向かう兄と別れ、遅いと言わんばかりの態度で待っていた二人の場所へ向かう。青く晴れ渡った清々しい空に重なる淡いピンク色をした桜の木は満開で、今から始まる高校生活を迎える私たちを包んだ。

## 2 人は支え合って生きている

私たちの家から二十分ほど歩いたところに高校がある。築百年はしているが去年に改装を行ったらしく、古い印象は全く感じさせない綺麗な学校だ。今日は校門に「入学式」と書かれた看板が立てかかれていて、真新しい制服を着た生徒がどんどん入っていく。入り口付近では各部活の部員たちがピラ配りに励んでいて、私たちも何枚か手渡された。

「部活動かー、なんだかわくわくするね！」

「そうか？俺はめんどくさいから興味わかねえ」

「俺も高校生になったら遊ぶと決めたんで」

チラシを手に、何もかもが新しい生活の雰囲気には浮かれ気分の私に対して冷めすぎている涼と俊。だがそんなことは気にもせず、私もなんか入ろうかなあー、何がいいと思う？ 私一度くらいは運動部に入ってみたいんだよね！なんて話しても二人同時に二つ返事をしてくるばかり。こんな時だけ暗黙のルールがあるかのように二人とも気が合うのだ。だけど…

「…まあ、華は絶対に怪我をするから許すわけねえだろ？樹兄貴が

と、付け加えるのが涼であって。

「華がこけたら笑ってやる」

と、付け加えるのが俊なのである。

双子といえども性格も顔立ちも似ていない二人。お兄ちゃんは涼。さらさらとした綺麗な短髪の黒髪をしていて、目はどこかしら私のお兄ちゃんに似ている。切れ長で優しく綺麗な瞳。華奢な身体つ

きの割には筋肉がついていて、中学ではバスケットボール部に所属していたからか身長も俊よりは高い。どことなく優しい性格をしているからか、中学の時なんかは周りの友達の中でひそかにファンクラブもあった。弟は俊で、髪は染めて栗色の短髪。目はくりっと可愛らしく、そのためどこか小動物らしい雰囲気がある。体形は涼と変わらずだが、背は涼より五センチばかり低いがそれでも175センチはある。可愛らしい顔から吐き出される言葉は恐ろしく、なのにこいつにもまたファンクラブというものがあつたのだ。

とかいう私は…普通。人ごみに紛れてしまえばどこに私がいるかなんて分からなくなってしまうだろう、それくらいどこにでもいる女の子。決して悪い意味じゃない、ただ、私の周りにいる兄ちゃんや、涼、俊が悔しいけれど目立ちすぎる。なにか取柄があればいいのに、今のところ特になし。唯一私に恵まれていて、本当に素晴らしいすぎて感謝をしているのも、お兄ちゃんと立花家の存在なのだが。

そんなことを考えていると、気づくと二人は先を歩いていた。クラス分け見に行くぞ、そう言われて急いで二人を追う。体育館の前に貼り出された紙にはもうすでにたくさんの人だかりが出来ていて、五クラスに分かれているみたいだが、あまりに人が多くて名前を確認できない。どうしようかと考えていると俊がさっき貰ったチラシの裏に私たちの名前を書き始め、見ず知らずの気弱そうな男の子に紙を渡す。そしてにこっと笑い一言。

「この名前探してこい」

ありえない、ありえないけど俊はどこに行ってもこうで。しかも一分以内にな、と付け加えいーち…と数まで数え出した。あまりの突然の命令に、啞然とする私と涼とその男の子。でも俊の堂々とした態度に負けたのか本当に探しに行ったのだ。



「何してんの、この馬鹿ドS！」

「何してんだ、この馬鹿ドS！」

私と涼が大きな声で同時に俊につっこみ、周りの子たちが少し驚いてこっちを見る。なのに当の本人は悪そびれた表情一つ見せない。むしろなんで怒ってるんですか、みたいな驚いた顔だ。

「その顔やめろ、うっとうしい！お前はどこでそんなねじ曲がった性格になったんだ」

「何言ってるの、人と人は支え合って成り立っていくんだよ」

「あ？何言ってるんだ、お前？どうしようもない馬鹿だなお前」

わーきゃあ、わーきゃあまた始まった喧嘩。まあいつも絶対に悪いのは俊だ。だからって言い争ってる場合じゃない、私はあの人に謝らなきゃいけないし自分で見に行っ確認するのが当たり前的事だ。人ごみの中に入ろうとすると俊に腕を掴まれる。

「離して。謝りに行かして、それに自分で見てくる」

「華は行かなくていい、どうせこけて怪我して帰ってくるのがオチ」

「うるさいな、行くったら行く！」

そう言い放った時、後ろから走ってくる足音が聞こえた。振り返るとさっきの男の子が息を切らし手の平に紙を握り締めこっちに向かってきた。私はその人にごめんなさい！と勢いよく頭を下げると同時に、お待たせしましたあ！と声を張り上げ紙を俊に渡す男の子。えっ？と私が頭を上げるとニヤッと笑う俊と私と同じようにポカんとした顔の涼がいる。

「やるじゃねえか、お前」

「とんでもありません！」

男の子はなぜか俊に敬礼までしている。俊は当たり前のように紙を広げクラスを確認しようとしたが、あまりに急いだのか緊張しているのか手汗で紙がボロボロになり肝心なクラスが結局分からない

でいる状態。すると俊は真顔になり男の子にもう一回行って来いと  
言ったところで涼の拳が頭を殴った。

「人に頼むからこうなるんだ。大体何もう一回行かせようとしてん  
だ、お前も行くぞ」

「そうだよ、俊が馬鹿すぎて私悲しくなってきたよ」

「めんどくせー」

私たちは嫌がる俊を引き連れて張り紙まで行こうとしたが、男の子  
はそこに立ったままだった。自分のクラスは確認できたのか聞くと、  
私たちのを探すで見ていないらしい。私はごめんね、と謝り一緒  
に確認しに誘った。

入学早々、式だってまだ始まってもないのにこんな状態で大丈  
夫なのか心配だけれども…今から確認しに行くクラス発表にドキド  
キしているのか、私の胸は楽しさに期待が溢れていた。

### 3 自己紹介は控えめに

「僕は石崎聡いしづみさとしと申します。見た目通り地味で冴えませんがよろしく  
お願いします…」

入学式も終わり今は各教室で担任の先生からの話と、各自己紹介  
を行っている。消え入りそうな声で自己紹介をしているのは先ほど  
の男の子だ。なんとも地味というか暗い自己紹介。自分の体形より  
少し大きい制服から見える腕は細く、特徴のない平凡な顔には薄め  
の眼鏡。気弱い性格が見て分かるほどにじみ出ている、先ほど少し  
話をした時に何で俊の言う事聞いたの？と聞けば、僕は昔からよく  
いじめられるし…だからなんか癖で、と返ってきた言葉に納得をし  
てしまった。

あ行から順に並んだ席では、石崎君は前から二番目。名前順に回  
ってくる自己紹介に、私はなんて発表しようか考えていた。こうい  
うのはなんだか苦手で、考えれば考えるほど悩む一方だ。

「何そんな真剣な顔してんの？華でも真剣な顔できるんですねー」

「年中何にも考えない人よりいいもん」

「涼と樹兄に伝えておくよ」

全く自分のことだと思っけてない俊はニコニコと笑いながら答える。  
あんたのことよ！と言ってやりたいところだが、ここで言い返せば  
口論になって注意されるだろう。初日から怒られるなんて絶対に嫌  
だ。だからここはぐっと堪える。大体なんで俊とまた同じクラスな  
んだろう。

涼と俊は双子だからなのか必ずと喋っていたいいほど同じクラスには  
ならない。これは小学校の時からそうだった。でもって私は小学校

のふたクラスしかない二分の一の確立で俊側になるのだ。中学では四分の一の確立を三年間連続で引き当てる。もうないだろうと思っていたが、ここでまた引き当てたのだ。

そして順番は俊に回ってくる。椅子から立ち上がり棒読みに近いやる気のない声で名前を言い、私を指差した。みんなが私を一瞬見てからまた視線を俊に戻す。

「えー、この隣にいる女は春川華で俺の幼馴染なんです。小学生のころから今までずっと同じクラスなんです。ここまできたら腐れ縁もすごいよね、ってことで俺と華は一セットだと考えて、俺に何か用あったら全部こいつによるしくお願いします」  
俊は話し終わるとニタッと私を笑う。

私はこの一年間を想像してなんだか泣きたい気持ちになった。

「俊のやつ、またそんなこと」

次の日の朝、私は朝が弱い俊を残して涼と学校に向かう。昨日の出来事を話すと顔をしかめて呆れてくれた。涼とは隣のクラスでいつも離ればなれだ。涼は俊と違ってあんなことを私には絶対にしない。しないというかそれが普通なのだが、俊といる時間が多し私には普通なんて縁遠いものだった。涼と一緒にクラスだったら、どんなにいいだろう。そんなことをこの時期になると考える。しかも今回は石崎君という俊の暴走地区が増えているのだから一段と先が思いやられ、ため息が出た。そんな私を見てフツと優しく微笑み、涼は頭に手をポンッと乗せてくれた。

「新学期早々そんな顔すんな。何かあったら俺も手伝ってやるか…」  
「朝から華とイチヤついていいなんて誰が許しました？」

そこにはさつきまで姿がなかったお兄ちゃんが突然現れ、涼の手を取る。私の頭を触ったのがよっぽど気に食わないのか笑顔なのに放つオーラは黒い。いくら僕の弟のような存在の君たちにも華に触れるのは話が別です、と涼に休む間もなく説教をしている。こんなこともあるかと隠れておいて良かった、とぶつぶつ言っているがその言葉を口にしたのが最後。涼からお兄ちゃんのお尻に蹴りが入った。

「昨日も言ったが、あんたは心配しすぎだ！どこまでシスコンなんだよ」

「涼が思っている以上にシスコンなだけです」

「自慢げに言ってるけど馬鹿なだけだぞ、それ」

そんな無駄な言い争いが始まると後ろから猛スピードで漕いだ自転車私たちの間を走り、急ブレーキをかけて止まる。場の空気は一瞬で止まったが自転車で乗っていたのは俊で、何食わぬ顔をしてごめん、わざと。ちんたら歩いてるのが邪魔でした、と言い出したのでまたぶり返されることになる。

「私先に一人で行ってるよー」

もう慣れっ子で、こうなってしまうばどうしようもないのだ。呆れながら先を歩くと、涼と俊はぎゃーぎゃー言い合いをしながら私をすぐに追い抜き、お兄ちゃんは私の隣を歩く。そして二人を見てクスッと笑っている。

「華、学校ではあの二人以外の男の子はみんな狼だと思っただよ、

いいね？」

「きっとそれは無理だけど……だってあの二人こそが狼じゃない、そんな事を思ったけど手を振り駅に向かうお兄ちゃんには笑顔を見せる。そして昨日と同じ、また先で待つ二人のもとへ急いだ。」

#### 4 残りものには福がある

「なんで俺がこんなめんどくさい事やらないといけねえんですか」  
「仕方ないでしょう、副委員長なんだから」

時間はお昼の休憩時間。私と俊は職員室にプリントを届けに向かっていた。今日、朝のホームルームで各委員決めを行っていたのだが誰も委員長をやるうとはせず、私はこんな時について自分から引き受けてしまうところが昔からある。華はいつもそうやって損な役につくね、と隣から言葉を浴びせられ私は俊を横目で睨んだ。先生が誰か副委員長への立候補はありますか、と聞くが私がさかさず俊を指名してそのまま俊が副委員長になった…というような過程である。そしてさっそくクラスアンケートを回収したプリント運びの仕事だ。といっても、私がプリント全部を持っていて、俊はただゲームをしながらついて来ているだけなのだからめんどくさいも何もないはずだ。

「少しは持つてよ」  
「今手を離すことができないから」

と言い合いしているうちに職員室に着く。すると職員室から涼が出てきた。

「あれ、涼ももしかして委員長になったの？」  
「まあな、誰もやりたくねえって感じだったからな」

どうせ華もそんなところだろう？と私に優しく微笑んだ。俊の事もお見通しだったのか、あんまり華にばかり仕事押し付けるんじゃないねえぞ、と言ってその場を去った。するとその後すぐにまた扉が

ら、女の子が一人出て行った。その子は背が高く、見るからにスタイル抜群。髪は綺麗な茶色をした長い髪に少しゆるいふわふわのパーマをしていて、ふんわりとした化粧が似合う子だった。

「ね、見た？めちゃくちゃ可愛い子だったよ、今の子！」

「それがどうしたっていうの」

俊は相変わらずゲームに夢中なのか、気にもしていないようだった。女の私でも見惚れてしまうような子だったのにもつたいない奴だ、と思いつながら私はその子の後ろ姿を見ると、涼に何やら話しかけている。きつと彼女が副委員なのだろう。

「あんなに可愛い人と仕事できるんだったら、涼も万々歳だね」

「華と仕事しないといけない俺はどうなるんですかね」

「その言葉そのまんまあなたに返すわ」

俺に仕事を押し付けてきたのは華でしょうが、と言い返され何も言えなくなつた。私の負けが見えた途端に俊は職員室の扉を開け、行ってらっしゃい、と笑顔で見送られた。

「えー、それでは今から来週に控えたオリエンテーションのグループ分けを行いたいと思います…」

午後の授業が始まった。先生が今説明をしているこのオリエンテーションは、県外に出たの二泊三日の交流会のようなもので、ちょっとした山の中のコテージで過ごす事になるのだ。配られたしおりに目を通しながらみんな話を聞いている。その時に俊が手を上げた。

「先生ー、まだそんなに打ち解けていないのにグループ分けなんて



めんどろです」

「先生ー、大丈夫です！気にしないで下さい！」

何を発言するかと思っただら、また俊はとんでもない事を言い出した。すかさず私はフォローに入って発言したが、先生はどこことなくシヨックを隠せないでいる感じた。私は席を立ち、教台まで向かい提案を出す。

「えーと…、あの、六人グループを五組と四人グループを一組作ればいいんです。で、今一緒になりたい子の名前を紙に書いて下さい。その人数同士足して、うまくグループ人数になればその人たちでグループになってもらいます。ちなみに、各グループ名前も考えてください」

もしうまくいかなかったらくじに変更すると提案したが、案外あっさりみんなそれぞれ名前を書き始めてくれたのでこのままでいけると思った。しかし、ここで問題ができた…といってもそれは私の問題だった。私が誰とグループになりたいかだった。

というのも、俊とずっと一緒に居たためにあまり女の子と話していない。周りの女の子はみんなそれぞれ数人に分かれて決めだしている。私が一人あたふたしていると肩をたたかれた。

「春川さんよね？一人なんですよ、私も一人なの。良かったら一緒にグループ組んでくれない？」

その時の私には女神みたいな存在に見えた。彼女は長い髪の毛一つにまとめ、整った顔立ちからは少し気の強そうな印象が見られる。私に向けられる笑顔はあどけなさがあり、とても親しみやすく感じた。私はありがとう、喜んで！華でいいよ！と笑顔で答えて見せると、櫻井美波さくらい みなみ。美波でいいよ、と彼女もまた笑顔返してく

れた。

「ところで華は、あの立花くんとは一緒に組むの？」

「え、俊？組まないよ」

だって組んだらすぐ手がかるよ、と美波に伝えると肩をグイッと後ろに引つ張られ、顔のすぐ隣に俊の顔を寄せられた。悪魔のように笑い、笑顔だというのに怖い。

「なんて言ったの？もう一回聞かせてくれない？」

「…なんでもないです」

嘘をつけ、悪く言ってたのはわかってんだよ、と俊に思いっきり頬を横に引つ張られる。痛いと涙目になっている私を見て美波が笑った。

「本当に仲いいんだね。いいな、羨ましいわ」

「…なんだ、あんた」

「華の友達よ、一緒にグループ組んだの」

…なぜだろう、俊と美波はお互い笑顔なのに全然打ち解けられていないこの雰囲気。お互いよろしくと言っているが目は笑っていない感じだ。そんな雰囲気になんだか耐えられず、私は俊に話かけた。

「俊はグループどうなったの？ちゃんと相手いる？」

「心配しなくてもちゃんというよ、余ってたの拾ってきた」

と指さす先には石崎くんがいた。石崎くんはなんだか下を向いて元気がない様子。また俊に何か言われたのかと心配になって石崎くんに近づくと、どうせ僕なんて…という言葉は何回かつぶやいてい

る。パッと俊を見ると俊はムッと顔をしかめて私を睨み返す。何でもかんでも疑うなと言わんばかりだ。

「いや、一人あたふたしてたんで。俺も相手が見つからないんで、誰にも気付かれずにあたふたしてるんなら一緒に組んであげるよ、って言ったただだよ」

「いや、あなたの言葉に傷付いてるから！」

「まあ何にしてもだ、これでうまくグループ分かれたんじゃないの？」

と紙を見ると、私たちの組み合わせでちょうど四人グループが完成しうまく分かれたのだ。美波も決まったならそれでいいよと納得をしているし、石崎くんに至っては落ち込んでいて話を聞いていない。俊はなら決定で、とグループ決定と紙を提出した。

「あ、ちょっと待って。名前考えないと」

「それなら俺が書いて提出してるよ」

と俊が言った。後日、グループ発表で印刷された名前によって笑いものにされるなんて知るはずもなく、私は新しく出来た友達の美波と楽しみだね、なんて話をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1730y/>

---

ブラコン！

2011年11月10日07時04分発行